

## 修士・博士のための海外渡航費助成金報告書

広域科学専攻 生命環境科学系 長谷川寿一研究室 修士2年  
高橋奈々

7/30~8/4にエストリル（ポルトガル，リスボン）にて開催された behaviour 2017に参加した。本学会は，第35回国際行動生態学会大会および2017年度動物行動学会議の合同国際会議であり，2年に1度開催されている。本合同学会では行動生態学や比較心理学，動物学など動物行動に関する幅広い分野の研究者が参加した。エストリルはヨーロッパのリゾート地として発展した街であり，非常に美しい街で1週間にわたる国際会議が行われた。

ヨーロッパは行動生態学発祥の地ということもあり，行動生態学や動物学に関する研究が日本に比べて活発である印象を受けた。筆者の研究対象は鳥類であり，国内では鳥類の行動生態学研究はどちらかといえば少数である。本学会では，口頭発表，ポスター発表とも鳥類の研究者が多数参加しており自身の研究に還元できるような知見を多数得られた。本学会では鳥類の比較認知に関するセッションが2セッション設定されており，非常に鳥類研究が盛んであることに感銘を受けた。各セッションでは，同じ動物種を対象とした研究であっても各研究者の専門分野やアプローチによって独自の視点が提供され，合同学会で様々な学



写真1 学会会場の様子



写真2 エストリルの街並

問領域の研究者が一堂に会することの重要性を実感した。ディスカッションでは，すでにある学問分野同士の連携が次の研究課題になるのではないか，といったような学問分野全体に対する意見が出る場面もあり，自身の研究アプローチについて考えさせられた。

筆者にとって本学会は初の国際学会参加であった。英語で自分の研究を紹介し，他の研究者と意見交換を行うことの難しさと意義を実感した。同じような研究テーマを研究している参加者からは，尤もだと思えるような指摘を得たり，互いの研究状況を共有することができ，有意義な時間となった。一方で，自身の研究テーマやアプローチと異なる背景を持つであろう参加者に対しては，自身の研究の意義を伝えきれなかったという実感があり，データの洗練とそれを伝える力を高めようという動機につながった。